

ゼロからの酪農にかける私の思い～家族と牛と共に歩む酪農経営を目指して～

山形県立農業大学校
畜産経営学科 1年 高橋 奎太

私の住む山形県飯豊町は県南部の置賜地方にあり、第1回「美しい日本のむら景観コンテスト」で日本一に選ばれたこともある農村地帯です。屋敷林に囲まれた農村の原風景が1500ヘクタールの広大なパノラマとなって現在も広がっています。

明治4年10月に旧上杉藩校興譲館洋学舎に教師として招かれた英国人チャールズ・ヘンリー・グラスが明治8年3月、洋学舎での4年の任期を終わり、横浜に帰る際、おみやげとして横浜の外国人居留地の仲間に「米沢牛」を持ち帰って、馳走したところその美味しさに仲間が驚嘆また驚嘆。その米沢牛を買った場所が飯豊町であり、米沢牛発祥の地と言われ肉用牛の飼育が盛んな町です。

また、置賜地域は本県酪農の先駆けであり、生乳出荷量は県内で1番多い地域です。そんな畜産が盛んな場所で私の家は酪農を共同経営で行っていました。

我が家の酪農の歴史は祖父の時代から始まりました。昭和36年に任意組合を地域内有志で発足させ、46年に農事組合法人を設立。当時の飼養頭数は約100頭で自給飼料生産や稲作を行っていました。また、第19回全国農業コンクールでは「天皇杯」受賞という山形県初の快挙を成し遂げる他、乳牛の借り腹を利用しての受精卵移植や優秀な和牛卵を摘出しての体外受精卵移植などを地域繁殖農家と行政と一緒に、年間50頭位を生産するなど地域一体となって酪農に取り組んでいました。しかし、法人経営の欠点でもある経営方針の違いなどから15年ほど前に共同経営から離脱したのです。

今では牛も牛舎もゼロの我が家ではありますが、私は幼いころ祖父と父が働いている牛舎に行き、子牛と遊んだり、ミルクを飲ませたりしていました。「牛といる時間が一番楽しい」という思いから時は経ち、「酪農を一生の仕事にしたい」と決意しました。中学3年になり高校進学を決めるとき、酪農家になるための第一歩として県内で唯一乳牛を飼育している山形県立置賜農業高校の生物生産科に進学しました。

「ゼロからの酪農なんて、牛飼いはそんなに簡単なもんじゃねえぞ。」父はこう言いました。しかし、私は祖父や父の酪農をしている姿をみて「俺も酪農をしたい」父の忠告には重みがあったものの、私にとって酪農という職業は「魅力あるもの」と思いました。

念願の置農での学習は毎日が充実し、1年間はあっという間に過ぎました。そして、2年生になると畜産を専攻し、本格的な畜産の学習がスタートしました。牛はもちろんですが、豚や地鶏、ヤギなど畜産に関する基礎知識や飼育管理方法を学ぶことができました。時には牛や豚の分娩に立ち会ったり、起立不能になった牛が治療不可能になり殺処分など命と向き合えたほか、宿泊当番では搾乳などの管理など様々なことをおこなってきました。初めて畜産の授業を

おこなった際、先生が「乳牛はミルクを1リットル作りだすのに、血液を400リットルも使ってるんだぞ。だから、牛のミルクは白い血液だ。」この話を聞いたとき、私の酪農への夢はさらに広がるとともに、「おいしい牛乳を多くの人に飲んでもらいたい」という思いが湧き起こりました。

また、先生に勧められて山形県ホルスタイン共進会に参加しました。置農を卒業したOBの方に全国の共進会で多くの賞を取られ、改良のスペシャリストがいます。その方の指導のもと、はじめて牛を引きました。訳も分からず、「ただ牛を引いていけばいいんだ。」と思っていましたが、実際は私の想像と違いました。会場に行くのと牛を綺麗に洗い、毛刈りされて白と黒の模様がはっきりとしている牛たちを見て、衝撃が走りました。いつも飼育している光景とは違い、美しい牛が係留場にいました。「どうしてここまでののか」不思議に思い、酪農家の方に話を聞くと、「牛を洗って毛刈りをすることで綺麗な牛にしてあげるんだよ、後はどうやったらいい牛に見せられるかリードマンの引き方も工夫するんだ」と教えていただきました。審査が始まると、リードマンである農家のかたは上下白の服に着替え真剣そのもの、牛たちも優雅に歩いています。その姿をみて私は、「自分もいい牛を育てて、共進会でリードしたい」という思いが湧き起こりました。この思いを現実にするための第一段階として、学校で飼育している子牛を1年間自分の手で育てることにしました。「フカセファーム インアール ナイス ダンディ」この牛こそ私にとって初めて子牛の時から育てた初めての牛です。春に行われる共進会に向け、引き運動や牛体の手入れなどを行い、手塩にかけて育て上げた牛を自分でリードする。まさに夢のようでした。そして共進会当日、朝早くにダンディを洗い最終調整をし、上下白の衣装に着替え、ダンディと共にショウリングへと入りました。いかに審査員に良い状態に見せるか、牛のコンディションはベストであってもこれはリードマンである私の腕にかかることです。ダンディと共に歩いていると審査員にピックアップされました。ですが途中でストップがかかり、前を歩いていた牛との比較が始まったのです。「どうか俺らを」心の中で思っていました。そして遂に序列が決定し、結果は優等賞二席というあと一步のところでした。しかし、この経験が私の思い描く将来の酪農経営の第一歩となったのです。

その後、北海道の十勝管内で法人経営をしている酪農家での研修の機会がありました。総飼養頭数が約500頭、圃場面積が約140haと山形県ではありえない大規模経営をされていました。私は1週間の研修期間で、酪農に関する国内外の動きや大規模経営のしくみを学び、「自分が目指す酪農経営」がはっきりと見えてきたのです。

キーワードは「自分たちで出来る酪農経営」

私が目指す酪農は、「家族で出来る規模の頭数を飼育し、いつでも牛に目が行き届き、良質な生乳生産にこだわる牛飼い」です。

具体的な経営ビジョンは、施設では、牛舎は搾乳牛舎が50頭繋ぎと育成牛舎と建て、初期導入で経産牛40頭、育成牛10頭を飼育。堆肥舎と機械格納庫の設置。パイプラインミルクカー

での搾乳をします。餌では購入粗飼料を最小限に抑え、耕作放棄地や河川敷を利用し、自給飼料の生産に取り組みたいと思っています。また、牛から出た排出物は自家処理の他、近くにある堆肥センターへの委託をしたいと考えています。さらに、牛群検定を実施し、飼養管理・繁殖管理・乳質管理・牛群改良などの生産全般に亘るチェックを行い、酪農経営における経済的損失を防ぎ高品質、低コスト生産といった経営をしていきたいです。

特に私は乳質管理と牛群改良を重点にしたいと考えています。ゼロからの酪農になるので、いかに収益を上げるかが問題になってきます。牛群の改良をすることでミルクがたくさん出る牛を作り、乳代効果を多くすることで収益につながると思います。しかし、ただ上げるだけでは「乳質は適当でいいのか」となってきます。乳質を良くするために体細胞数を基準値以下に抑えなければいけません。そのためには牛群検定に参加し個体管理を徹底するほか、牛床を清潔に保てるように敷料やカウトレナーの導入を考えていきます。

次に自給飼料生産では、耕作放棄地の利用や河川敷の整備・管理として借り受け牧草を作りたいと考えています。私の生まれ育った飯豊町には耕作放棄地や自宅の隣を流れる白川の河川敷を有効活用することで、農地や河川の整備をすることができると考えています。しかし、河川敷の利用は堆肥の還元や肥料の散布などの問題点もあり難しい面もあります。そういった問題を考慮しつつ自給飼料の生産をしていきたいです。

このことを実現に繋げるために私は高校卒業後、山形県立農業大学校の畜産経営学科酪農コースに進学し、現在は酪農経営、飼養管理、繁殖管理、牛群管理などの基礎知識を学んでいます。毎日の実習は専門的な知識・技術を現場の目線で得ることができ、私にとって充実した生活が出来るとてもいい学校です。大学校に入学し2カ月が経った時、10日間の農業体験学習がありました。実習先の酪農家さんは私の家の近所にあり、飼養頭数57頭、搾乳はパイプラインミルクで圃場面積が1haの家族経営をしています。毎日の作業がとても新鮮で、普段の酪農家の1日の流れや乳牛の改良について知ることができました。実習の中で経営の特徴をお聞きしたところ「乳牛の能力、長命連産に向けた体型の育種改良を進めながら、自給飼料生産にも力を入れているんだ」と教えていただき、まさに私が目指している酪農経営そのものだと感じました。また、研修後に共進会があり、研修先の乳牛を引かせていただけることになり、私は農家の方と一緒に毛刈りから調教、準備をおこなってきました。共進会前日に会場搬入して管理をしたり、他の酪農家さんとコミュニケーションをとったりしているうちに、酪農の輪というものはとても凄いものだと感じました。お互いに自分が出品する牛について語り、改良の話や経営の話、これからの酪農について話をしていました。こんなに酪農について熱くなる方々を見て、私は、「いつかは俺もこうなりたい」という情熱が芽生えてきました。ショウ当日は最終調整をし、初産の4部に出場しました。経産牛ということもあり歩かせ方や立たせ方はもちろんですが、乳器が1番重要視されてきます。そういったことを踏まえ牛を引き、結果は

優等賞3席と惜しい結果でしたが、何より貴重な経験をさせていただいた上に、共進会で乳牛を引かせてもらって最高の研修となりました。

私はこれから専門的な知識・技術を徹底的に勉強する他に人工授精師や削蹄師などの資格を取得したいと考えています。なぜなら、自分で乳牛を飼育する以上繁殖管理や蹄の管理を自分の手でおこないたいからです。特に削蹄は外部に頼むとそれなりのお金が掛ってしまいます。そういったちょっとしたことを自分で出来るようになれば、自分なりの経営・管理が出来ると思います。繁殖管理では、良い牛を作るために母牛に交配する際にその牛の欠点を見つけ、欠点を補う種を交配する補正交配を積極的に行い共進会で通用するような良い娘牛をつくりたいです。また、今後の卒論として「乳質の体細胞数の減少」について取り組みたいと考えています。農大の牛の中に体細胞数の高い牛が3頭ほどいます。体細胞が高いと乳房炎になったり出荷生乳の乳代単価を下げられたりと経営的にダメージを受けます。将来酪農をする際に、良質な生乳生産を目指しているのでも、体細胞数の減少について調べて将来の経営に活かしていけるようにしたいです。そして大学卒業後は酪農関係機関などで研修を積み、10年後を目途に酪農経営をスタートさせたいと考えています。最初の頃は私と父の2人での作業となると思います。将来的に私にも家族が出来たらみんなで酪農に従事できたらいいと思います。

私が目指す酪農経営はゼロからであり、さらには理想が高く現実的に考えると厳しいかもしれません。3月11日に起きた東日本大震災や福島第一原発事故による風評被害において、酪農家界は大打撃を受けました。停電により搾乳ができなかったり、原発の風評被害で生乳の廃棄、原発圏内の酪農家は牛を手放し、廃業に追い込まれるなど様々な問題がありました。その中で私が一番悲しかったのは、福島の酪農家が自ら命を絶ったことです。放射能汚染により生乳の出荷制限、原発圏内からの退避、飼育している牛たちは餌を食べなくなり、そして命を絶つ。酪農家にとっては精神的に苦痛なことでした。栃木県那須町で親戚も酪農をしていますが、かなりのダメージを受けていました。この時私は、「これからの東北、東日本の酪農を元気にしたい」こう思いました。だからこそ祖父や父の姿を見たり、今回の大震災の経験、乳牛を愛する気持ち、良質な生乳生産をしたい気持ちは、これから先ずっと持ち続けます。今後どのような酪農情勢になるかは分かりませんが、現場から得る経験を大事にして将来の酪農経営に活かしていきたいと思っています。そして、家族と牛が共生できる「楽農」。つまり、自分たちが仕事をしていて楽しいと思えるような酪農経営を目指し、これから歩んでいきたいと思っています。